

流行の髪型 決め手は整髪料

[企画展のご案内]

「近代香粧品なぞらえ博覧会
—舶来エッセンスを使った
和製洋風美のつくりかた—」開催

[かわら版]

次号発行日変更のお知らせ

香蝶楼国貞 画「栄草当世娘」(部分)・早稲田大学演劇博物館所蔵
日本髪を結う女性。
畳に置かれた結髪道具の中には髪油壺が描かれる。



流行の髪型決め手は整髪料

長く豊かな黒髪は美人の証！髪は女の命だった

大陸の影響をまた受けていた古代から、日本独特の結髪の歴史は始まる。飛鳥・奈良時代、一般の女性は髪を後ろで丸め、木製の櫛を差していただけだったが、宮廷では壁画に残るような唐風の髪型が流行する。

平安時代も中ごろになると大陸の影響も薄れ、国風文化が栄える。女性の髪型は貴族から庶民まで髪を自然に垂らす垂髪になり、髪は長ければ長いほど美人の象徴でもあった。

鎌倉〜室町時代もまだ基本的には垂髪の時代である。しかし、平安時代ほど長く伸ばしてはおらず、せいぜい腰からお尻くらいの長さで、そのまま垂らすか襟首の部分を元結で結んでいた。

このようにみていくと、労働を余儀なくされた場合の髪型は別として、歴史上で

垂髪の時代はかなり長く、平安時代から室町時代までの約七〇〇年にも及ぶ。

時代変わって、髪型変えて

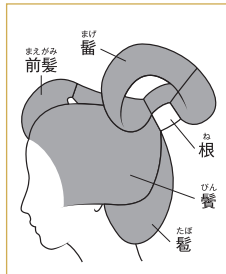
応仁の乱(一四六七〜一四七七)以降、身分や社会が大きく流動する。女性たちも争乱の世を経て、結ぶ・巻きつける・布で覆うなど動きやすい髪型をするようになり、七〇〇年ほど続いた垂髪の時代から、奈良時代以来の結髪に戻る。

結髪は安土桃山時代後期より始まり、発端は明の女性の髪型を模した唐輪髷であるが、一方で男子が結う若衆髷の影響を受け、男装して踊った出雲の阿国に始まるともされる。その後、阿国の人気にあやかり遊女や女性芸能者を中心に結髪は進化していく。

江戸時代の日本髪は大きく四系統に分かれる。唐輪髷から変化した兵庫髷、若衆髷から変化した島田宿の遊女がしたという島田髷、湯女だった勝山考案の島田髷

から派生した勝山髷の三種は、いずれも遊女や女性芸能者たちがした髷で、こぞって研を競った。

そして、もう一つは、室町時代ごろに宮中の女官などが宮仕を以外で、動きやすくするため、垂髪を笄に巻きつけた笄髷がある。こちらは団子状にした髪に笄を差しただけの非常にシンプルな髪型であるが、江戸の一般女性の多くは、美しい髷を結えるはずもなく、おもにこの実用に徹した笄髷をしていたようである。



おもな日本髪の部位名称

日髪と持髪

江戸時代後期の風俗誌『守貞漫稿』には、「寛政の写本」『思出冊子』に云う、女子宝暦までは日髪なり。そのころ髪差し出来、程なく止

み、燈籠髷流行り、髪差しを用ひ持髪となる。日髪と持髪と半々なり」とある。日髪とは毎日髪を結い上げることで、持髪とは一度結い上げた髪を数日持たせる髪のことである。宝暦(一七五〜一七六四)ごろまでは女性には毎日髪を結っており、時代が下って日髪と持髪が半々となる。

皆が日髪であった江戸時代初期〜中期までは、まだ鬢や髷といった区分はなく、頭頂部を一束で結び(前髪を作る場合は分ける)髷を結っていた。基本的には今現在の力士のよ

うな髪型である。女性の結髪や結髪道具を図絵と文献をもとに考証した江戸後期の書物『歴世女装考』(岩瀬百樹著)には、宝暦以前の髪型が以下のように図示されている。髷の形はさまざまだが、いずれの絵も髷の部分は後ろに長く伸びているのがみえる。髷はもともと、頭頂部



慶長十八年(一六三三)



天和三年(一六八三)



享保八年(一七三三)

で結い上げた髪が髪の重さでゆるみ、たるんだ状態に より自然と出来たものが、徐々に意図的に髷を長くし始め、一七世紀末には髷を突き出して整える髪型が流行する。享保(一七一六〜一七三六)の末ごろには髷差しという髪の中に芯を入れて髷先を上げる結髪道具まで登場する。

『守貞漫稿』にも、「宝暦は髷差しを用い、程なくしてなくなる」とあるので、髷先を発達させる髪型はこのあたりで流行らなくなるのだろう。

複雑な髪型ゆえに…

左右に大きく張り出した形が燈籠に似ていることと、張り出した鬢が透けてみえることから燈籠髷と呼ばれ、明和年間(一七六四〜一七七二)以降大流行する。燈籠髷はこれまでの結び方と違い、髪を前髪・鬢・髷に分け、各部位を集めた根という土台を作る。鬢を張り出させるための鬢差しの結髪道具と根を必要とする結い方は、髪型のパターンは広がるが、複雑で手間がかかる。それゆえこの時期、女髪結いという女性の髪を手がける専門の職人が現れる。しかし、まだ髪結いの料金は高く、毎日頼めるものではな

かった。結果、一度結び上げたら数日持たせる「持髪」が発生したのである。



燈籠鬘
安部玉腕子著、当世かもし雛形
安永八年(二七七九)・国立国会図書館所蔵

変わりゆく整髪料―髪水はもう流行らない

前述の『守貞漫稿』は次のように記述が続く。「近年、張りぬき鬘入れ出来、油多く付け幾日もなく持髪にするより女結髪と云う者出来、朝鮮櫛笄以前よりあれども鬘差しと同時より専用となり、今は水櫛は名のみにて陶器の鬘水入れも売家なし云々。守貞云う、日髪は日梳き、持髪は一梳き数日を保つを云う」。

江戸時代の後期になると、張りぬき鬘入れという張り子の結髪道具が登場する。燈籠鬘が大流行した

時代ののち、鬘や鬘、髻の形はますます多彩になる。また、後期になると水櫛は名前が残るのみとなり、鬘水入れも売れる店がなくなっている。髪型の変化により整髪料にも変化が現れるようである。

鬘水とは、マツブサ科の常緑樹であるサネカズラ(ビナンカズラともいう)の茎を刻み、皮を剥いて水に浸けておくことで得られる粘水の整髪料である。髪をつやを出したり、ほつれを解いたり、汚れを落とすものとして中世より用いられていた。ちなみに楕円形をしているのは、櫛を直接浸して使っていたからである。



鬘水入れ(前方二点)
豊島区教育委員会所蔵

天保元年(一八三〇)刊行の随筆『嬉遊笑覧』にも以下の記述がある。「びな

んかづらを水に漬けて用いる器、鬘水入れという塗物も金物もあり、形円扁なり。(…中略…)これまた一時の妖草というべきにや、かくいへりしも廃れて今は久しくなれど、近頃まで油店の看板にかづらの束ねたるを置たりしが、それ

もいつか皆うせて、唯両替町なる下村の店にのみ、もとのままにおしるいの看板の上のせて有り、そのあるじに尋ねければ、今も

稀にはこれを求めにくるもの有とぞ。ここでも同じく「鬘水は廃れて今は久しい」といい、「稀に買い求めに来るものがある」程度である。

鬘水は、江戸時代後期に書かれたこれらの文献を読むと懐かしい代物として書かれているので、すでに使う人も激減していたようだ。江戸市中の発掘調査においても、陶器の鬘水入れは一八世紀末までの遺物として出土すること

が多く、それ以降にみられる鬘水入れは伝世品か婚禮道具のような特別に誂えたものと思われる。

一方で、整髪料には髪油がある。ごま油や菜種油、胡桃油、椿油といった液状の髪油は水油といい、艶出しや汚れ落としに使われた。水油は髪油壺に入れ、油を浸み込ませた綿(油綿)で髪に塗る。

最強のキープ力を求めて

鬘水も水油も髪への使用法としてはさほど差がないように思える。にもかかわらず、水油は江戸の後期以降も存在し続け、鬘水は廃れていつてしまう。

これは、さらに髪型が多様多様化し、完全に「持髪」に習慣が変わった時代に、幾日も美しいままの髪型をキープするには、水溶性の整髪料では間に合わず、鬘付け油や伽羅の油といった固形の強力な整髪料がより好まれていったことが要因と思われる。も

う、鬘水入れに櫛を浸して整髪するような時代ではないのだ。水油がかるうじて残ったのは、整髪というよりも艶出しや汚れ落としとしての用途であろう。

やがて生まれる

和製洋風美

江戸時代、浮世絵に描かれるような美麗な結髪ができる身分の者はごくわずかで、一般的にはシンプルで実用的な髪型をしていた。日本髪が庶民に普及するのは、幕末から明治時代初期にかけてである。

明治一六年(一八八三)の鹿鳴館の落成、明治一八年の婦人束髪会による日本髪廃止運動等により日本髪は徐々に衰退していくかにみえたが、日清戦争勃発により一時日本髪に戻る。その後、束髪は明治時代後期に復活し、前代までの日本髪技術を追いついていく。鬘付け油や伽羅の油とともに。

企画展「近代化粧品などらえ博覧会」

— 舶来エッセンスを使った和製洋風美のつくりかた —

2017年10月21日(土)～12月10日(日)開催 企画展観覧料600円

明治元年(一八六八)、日本が近代国家への道を歩み始めたときから数えて一五〇年目となる今年、紅ミュージアムでは、「化粧品」の近代化に焦点をあて、その道のりを辿る展覧会を開催します。

化粧品とは、香料や化粧品類を総称する語です。明治時代以降、日本の化粧品業界は、フランスやドイツ、イギリス、アメリカ等諸外国の化粧品に多大な影響を受け、向上に努めてきました。化学知識の導入によって原料の安全性追究に目覚め、無害な化粧品の創製がうながされると同時に、用途・効能別による多品種化・分類化が進みます。

た、外国製品のもつ豊かな香気は、日本古来の薫香とまったく異なり、ゆえに新時代の化粧品を標榜する上で輸入香料が必需の原料となつていきます。明治期の西洋の香りに対する強い憧憬は、香料研究の熱量となつてあらわれ、大正期以降の調香技術の進歩、合成香料の国産化へとつながっていくのです。

面でも西洋の美を糧に成長していきます。本展では、明治期から昭和初期の国産化粧品と、その生い立ちの源泉となつた外国製品および関連印刷物を紹介いたします。近代化粧品が辿つた発展の道のりを、随所に注がれた舶来エッセンスとともにご覧くださいます。

【開館時間】
10時～18時 入館は17時30分まで
※11月17日(金)のみ記念講演会開催につき20時30分まで延長開館

（協力）
アタチヨシオ、花王株式会社・花王ミュージアム、株式会社カネボウ化粧品、株式会社クラボウコスメックス、株式会社資生堂、資生堂企業資料館、新宿区教育委員会、(財)日本粧業会、化学園大学図書館、ポトルシモアター

※観覧料と引き換えに企画展パンフレットが付きます。

企画展のご案内

一方、化粧品の外観においても、外国製品と日本製品との隔たりは明白でした。容器の造形、意匠、包装やラベルなどのパッケージデザイン、いづれをとつても外国製品は従来品にない魅力にあふれており、日本の化粧品業界はデザイン制作の



Information かわら版

次号発行日変更のお知らせ

諸般の事情により、『紅ミュージアム通信』第44号の発行日を変更いたします。
次号は2018年(平成30年)3月1日頃の発行となります。

Since 1825 伊勢半本店  ミュージアム

●開館時間/10:00～18:00 ●休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)
東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分
<http://www.isehantonten.co.jp>